

その 24

消された軍歌 「海行かば」



陸奥國小田郡 黄金山神社

陸奥国に金を出だす詔書を賀(ほ)く歌

「葦原の 瑞穂(みづほ)の国を 天降り 知らしめしける 天皇(すめろぎ)の 神の尊の 御代重ね
天(あま)の日継(ひつぎ)と 知らし来る 君の御代御代 敷きませる 四方(よも)の国には 山川を
広み厚みと 奉る 御調(みつぎ)宝は 数へ得ず 尽くもかねつ 然れども 我が大君の 諸人を
誘(いざな)ひたまひ 良き事を 始めたまひて 金(くがね)かも たしけくあらむと 思ほして 下悩ますに
鶏(とり)が鳴く 東(あづま)の国の 陸奥の 小田なる山に 金ありと 奏(まう)したまへれ 御心を
明らめたまひ 天地の 神相うづなひ 天皇の み霊(たま)助けて 遠き代に かかりしことを 朕(わ)
が御代に 願はしてあれば 食(を)す国は 栄えむものと 神(かむ)ながら 思ほしめして もののふの
八十伴(やそとも)の緒を まつろへの 向けのまにまに 老人(おいひと)も 女(をみな)童(わらは)も
しが願ふ 心足(だ)らひに 撫でたまひ 治めたまへば ここをしも あやに貴み 嬉しけく いやよ思ひて
大伴の 遠(とほ)つ神祖(かむおや)の その名をば 大来目(おおくめ)主(ぬし)と 負ひ持ちて 仕
へし官(つかさ) 海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめ かへり見は
せじ と言立て(後略)」

(葦原の瑞穂の国を天降り君臨された天孫の御末の天皇が、幾代も天つ神の御領土として知ろしめした大御代ごとに治められる四方の国々は、山も川 広大なので奉る貢の宝は数えきれず挙げ尽せない。しかしながら、わが大君が諸人に仏の道を唱導され、大仏建立という素晴らしい事業をお始めになったが、黄金が果してあろうかと思われてご心痛遊ばしていたところ、(鶏が鳴く)東の国の陸奥の国の小田郡の山に黄金が出ましたと奏上したので、愁眉をお開きになり「天地の神祀も共に賞で皇祖神の御霊のご加護もあって、遠い昔このように金を産したことを朕が御代にも再現したので、この国は栄えるであろう」と大御心にお思いになり、もろもろの官人たちを励ましてお指図のままに、老人も女子供もめいめいの満足するまでいたわっておやりになるので、このことがなんともかたじけなくいやよもってうれしく思い、大伴の遠い祖先のその名を大久米主と呼ばれて奉仕した職柄ゆえ、「海に行くのなら 水びたしの屍 山に行くのなら 草むした屍をさらしても 大君の お傍で死のう 後悔は しない」と誓っています)

大伴家持(巻 18・4094)

この歌は、「海ゆかば」が詠み込まれていたため、【初版本】から削除された大伴家持の長歌である。

前回まで、3冊の『萬葉集物語』の本文を読み比べてきた。いずれも本の最後は「を(お)わりに」と「付録」が付されているが、【初版本】の「付録」と裏表紙の見返しにもあった「海ゆかば」がカットされ、「序」に始まり、見返しまで含めると、【初版本】に繰り返し出た「海行かば」の歌はすべて削除された。つまり、『萬葉集物語』から抹消されたのである。それは、この歌が戦争の記憶と結びついた軍歌になったことに尽きるだろう。

この大伴家持作詞とされる軍歌「海ゆかば」は、『萬葉集物語』の【初版本】が書かれる3年前の昭和12年、当時の大日本帝国政府が国民精神総動員協調週間を制定した際、そのテーマ曲として、日本放送協会からの委嘱により信時潔が作曲し、ラジオの「国民歌謡」として放送されたものである。ちなみに、ラジオ「国民歌謡」は、月曜から土曜まで毎日5分間週替わりで放送され、戦後は、NHK「ラジオ歌謡」としてラジオ第1で放送された。その後はNHK「みんなのうた」として現在に至っている人気番組である。

大阪の教会牧師の三男として生まれた信時は、幼少よりオルガンや賛美歌に親しみながら育ち、東京音楽学校（現在の東京芸術大音楽学部）に進学。ドイツ留学で作曲法などを学び、帰国後に東京音楽学校教授となる。戦前戦後を通じて数多くの作品を作曲、その数は少なくとも1000曲以上とされている。作風は簡素にして重厚とされ、昭和15年、国民奉祝歌として作曲した「皇紀二千六百年頌歌」や北原白秋作詞、信時作曲の大作「海道東征」などと並んで、この「海ゆかば」も、その音楽性を高く評価する声が多い。

戦意高揚の国民歌謡として歌われ始めた「海ゆかば」は、やがて太平洋戦争が始まると、大本営発表の際や戦いに赴く兵士の決意を詠った歌、学徒出陣では壮行歌として使われることになる。一方、アツ島玉砕以来悲劇的なニュースを伝える時に演奏されたことから、次第に「鎮魂歌」としても使われるようになり、単なる軍歌に止まらず準国歌と呼ばれ、人々の心に刻まれることとなった。

戦後、信時は東京音楽学校の校長に就任の要請を受けるが固辞している。「『海ゆかば』で若者を戦場に送り出したことを悔いているからだろう」という人もいたが、本人は、軍歌「海ゆかば」を作曲したことについて一切釈明をしていない。1962年、ある週刊誌のインタビューには、次のように答えている。「今も人々に歌われるとすれば、それはあの当時の戦死者とか靖国神社とか、そういったなまなましいイメージをからませて歌われないと思う。少なくともそうあってはならないんです。もしああいう歌が次の世代にも歌われるとすれば、作られた当時の広い意味での実用価値を越えた芸術的価値ですね」。

ところで、この軍歌の作詞は大伴家持とされているが、本当にそうなのか？確かに家持の長歌から引用されてはいるが、家持が作ったものではないことが、【初版本】からカットされた「十・萬葉人の考」の章に書き込まれていた。次の部分である。

<聖武天皇はお喜びのあまり、臣下たちに詔を賜はりましたが、その中に特にこの文句をお書きあそばされたのでした>と、あるように、「この文句」は、聖武天皇が書いたものだった。

聖武天皇の詔を聞いて感激した家持は、この長歌を詠み、その歌の中に天皇が書いた「この文句」を引

用したのである。そして、これも本文に、<この「海行かば」の句は、武人の家柄である、大伴氏（家持が當主です）と佐伯氏（大伴氏の一族）が、代々語り傳へて来た家訓即ち家の誠（いまし）めでした>と、あるように、武人の家の家訓だったのである。従って、万葉集の大伴家持の長歌から引用はされているが、軍歌「海ゆかば」の作詩を大伴家持とするのは、明らかに誤りである。

冒頭の「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌」を見てほしい。家持の 46 首の長歌の内最も長い長歌で、「海行かば」以下については割愛しているが、この長歌を読んでも分かるように、歌題の通り、陸奥国に金が出たことを「賀(ことほ)ぐ歌」、つまり「祝い歌」であり、兵士を戦に駆り立てる「軍歌」につながるような歌でないことは言うまでもない。つまり、改訂にあたって全面的にカットしなければならないような歌ではなかった、ということである。「海ゆかば」の部分が、軍歌として利用されたことから、この重要な長歌が、『萬葉集物語』から消えてしまったことはなんとも残念なことだった。

ところで、信時は、万葉集を愛好していたのだろう、この「海ゆかば」だけでなく、万葉集の歌を 10 曲以上作曲している。「海ゆかば」と同じ家持の「ムナギを喫(め)せ」と詠った「瘦人を嗤う歌」という愉快的曲や山上憶良の「子等を思ふ歌」等を作曲している。この「子等を思ふ歌」は、昭和 13 年コロムビアからレコードとして発売されたが、その時「子等を思ふ歌」は B 面で、その A 面が「海ゆかば」だったという。

最近ある知人から、たまたま「子等を思ふ歌」の思い出話を聞いた。「高校時代に合唱部に属していた時に歌った混声合唱『子等を想う歌』は今でも忘れられない曲調と歌詞です」。

「海行かば」は歌うことを拒否する人もいる一方、まだ歌われることもあるが、この「子等を思ふ歌」を実際に歌ったという話を聞いたのは初めてのこと。一度は聞いてみたいものだが、「海ゆかば」と違って、なかなか耳にする機会がない。

3 冊の『萬葉集物語』を読み比べてきて、分かったことをまとめてみる。

そもそも 3 冊を読み比べるきっかけとなったのは、【初版本】と【改訂本】の頁数の差が 60 頁もあったことから、それはなぜか、と思っただけだった。そして、読み比べの結果、削除された 60 頁のおおよその内訳が分かった。



(紙質の違いはあるが、本の厚さの違いは歴然)

60 頁の約半分の 30 頁余りが、「海行かば」など、忠君愛国に関わる部分で、【改訂本】では、そのすべてがカットされていた。その他 20 頁弱が、【初版本】の各章の最後についている註が、「父兄のための註」として、保護者のために懇切丁寧な註が付されていたのに、【改訂本】では、単に「註」として、簡潔な補足説明に代わったことから頁数が減った。残り約 10 頁が内容や表現の改訂に伴う頁数減だった。

【初版本】の冒頭、著者の叔父にあたる女子学習院院長が、「序」として推薦文を寄せている。

<少年少女諸君>と呼びかけ、この本を、<著者は東北帝國大學で日本歴史を勉強し、ことにこの本を書くために、いろいろの本を読んでみますから、基礎的の知識にはあやまりなく、その點は安心してお読みになることが出来ると存じます>と、子どもたちに薦めている。

著者の森岡さんが【初版本】を書いたのは、【復刻本】のプロフィールによると、日本女子大と東北帝國大學を卒業した 26～7 歳。気鋭の若手研究者だったのだろう、若書きの『萬葉集物語』だった。そして戦後、さらに東京大學大学院を修了して、学習院女子部（中等科、高等科）の教諭となり、この時期【改訂本】の改定に当たっていることは前述した。

しかし、推薦文は、<基礎的の知識にはあやまりなく> <安心して読める>と子どもたちに薦めているが、この改訂の結果を見る限り、太平洋戦争をはさんで、改訂せざるを得ない「過ちと不備」があったことは確かだろう。終戦直後の墨塗り教科書の歴史はよく知られるところだが、（もっとも公文書の黒塗りの伝統は現代も引き継がれているようだ）、軍国教育は、國が国定教科書などで強制しただけではなく、著者個人が自らの意志で、ごく普通の出版物の編集でも協力していた。それも、新進の学究が、その若き情熱を傾け、高度な専門性、豊かな表現力を以てして、忠君愛國教育に加担した、という時代の動向を見ることができる。とりわけ、<兒童のための萬葉集>として刊行され、結果として子どもたちの忠君愛國教育のために萬葉集を利用したことは、たとえ、時代の趨勢とは言え、その対象が幼い子どもたちであるだけに認められるものではない。ただし、著者自身も、同じような軍国教育を受けてきた結果、このような物語を書いたのだろうと思うと、教育の力、その影響力が強かったということだろう。いずれにしても、【初版本】が、教職に就いてからの出版でなかったことはせめてもの救いだったとすることができよう。

この『萬葉集物語』を発掘するきっかけになったのは、イスラームやアラブ文化研究の文化人類学者で、元日文研所長の片倉もとこさん、もとこ先生だったことは前述した。先生は、小学生の頃『萬葉集物語』に出会い、まるで童話を読むように繰り返し読んだという。以来、萬葉集をひも解いては、しばし萬葉の世界を逍遙したという。そして今回、『萬葉集物語』が実は忠君愛國教育の本だったことを告げ、子ども心にどう思ったかと尋ねると、もとこ先生は、「そうですか。『忠君愛國』については、まったく覚えていません」という。当初、著者の森岡美子さんに会うことを熱望したが、それを知って、「今さら、森岡さんにお目にかかって、『忠君愛國』について問うても仕方ないので、お会いするのはやめておきます」ということだった。それが、2010 年頃のこと。その時、森岡さんはすでに入院中のため、そもそも会うことはできなかったが、その後、もとこ先生は 2013 年、森岡さんは 2014 年に相次いで亡くなられた。森岡さん、享年 102、長命だった。

もとこ先生と同じように、小学生の時、この『萬葉集物語』に出会い、その虜になった人がもう 1 人いた。小説家で文化勲章を受章した平岩弓枝さんである。1969 年刊の隨筆『旅路の旅』の中の「私の愛読書」の中に次のような記述がある。

<一人っ子のせい、子供時代から本ばかり読んでいたらしい。（略）私の読む本は、たいいてい、父が買ってくれた。その頃のもので『萬葉集物語』（森岡美子著）というのは今でも本棚にある。これは、私が萬葉

集というもの、言いかえれば日本の古典にしがみつくと、きっかけの本であった。

小学校5年、6年、中学時代と何度でも繰り返し読み、これを土台にして様々の万葉研究書にとりついた。当時の私は、ものすごい万葉信者で、その熱病が一応、冷たいはずの今でも、そのころに勉強したことが、しばしば役に立つし、古都、奈良へひかれる理由も案外、このへんにあるのかもしれない。

高校に進学して、偶然、歴史の先生が『萬葉集物語』の著者である森岡先生だったときの感激は今でも忘れない。したがって、日本歴史の点は、私の学生生活で最高点を記録した>

『萬葉集』ナウ……そこで、平岩さんに、「当時、忠君愛国をどう思ったか？今、『萬葉集物語』についてどう思うか？」を聞きたく連絡したが、直接会うこと叶わず、平岩さんの娘で代々木八幡禰宜の平岩小枝（こずえ）さんに、何回か聞き取ってもらった。

「まず『萬葉集物語』が忠君愛国に利用されたということについては、89歳の母には全く、その意識は残っておりません。そういう時代だったから、だそうです。小学生時代はただただ面白かったようです」

「母は神社の一人娘で、宮司であった父親は明治生まれの生粋の忠君愛国の人間でした。本人も戦前生まれですから、そもそも忠君愛国になんの抵抗もなかったのでしょう。そして、おそらく戦後、時代が変わっても家庭内の思想（？）はあまり変わらず、今回のご指摘のような問題意識は芽生えたのかもしれませんが、それを凌駕する感動の印象が今でも強いようです」

「母いわく。文学は常々、人が生み出す、人は時代を生きているので、文学が時代に影響を受けるのは仕方がないと。それに勝る、『萬葉集物語』に出てくる親や子を思う思いに素直に感動すると。この人を愛しいとか、悲しいとか、そういう感情がストレートに出ているところ。一方で、短い和歌のなかで、言葉を大切に使い、自然と情景が目につくか感情と重なる表現、その技術。勝手にストーリーを膨らませて楽しむことができると申しておりました」

「その時代時代で、どのように理解されるか、それはその人、その時代次第。利用されたとするなら、それも万葉集の魅力のなせるわざ、作者の罪ではない、ということでした」

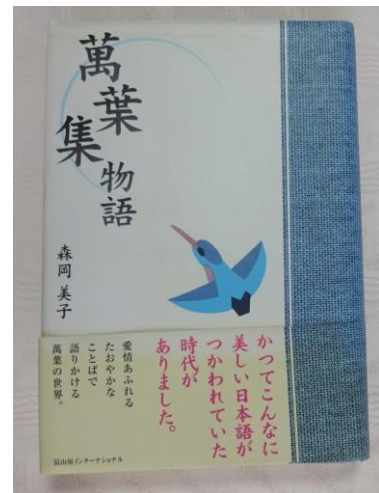
「母は家持が大好きでした。よく娘に熱く語っておりました。憶良も好きでしたので、ああ、それはこの本の影響だったのかもしれないと、今回の取材を受けて感じました」。

『萬葉集物語』には2つのねらいがあるとしたら、その1つ目のねらいとも言える「忠君愛国」については、面白いことに、このお二人とも、まったく同じで、「記憶がない」、「意識がなかった」とのことだった。そして、二人ともに、「童話のように繰り返し読んだ」、「ただただ面白くて繰り返し読んだ」というように、著者のもう1つのねらいである <少年少女たちに、おもしろく飽きずに読ませる> ことには、大きな成功を収めたのである。これは、『萬葉集物語』が、いかに「忠君愛国」という軍国の衣を纏おうと、そこからしみ出る「万葉集の魅力」が勝っていたということだろう。著者の森岡さんの、「万葉集の魅力」を子どもたちに伝えたいという思いと、3つの大学で培った専門性と表現力によるところが大きかったということだろう。

ただし、今回の例はたまたま 2 人ともに少女だったけれど、もしそれが少年だったら、どうだったのだろうか。『萬葉集物語』を読んだ少年たちは、「忠君愛国精神」や軍歌「海ゆかば」を、どのように受け止めたのだろう。日中戦争から太平洋戦争に突入したまさにその時、幼いとはいえ男子（おのこ）たちの心には、「万葉集の魅力」より「忠君愛国」の引力の方がはるかに勝ったのでは、と考えるのもあながち間違いではなかろう。

ところで、【初版本】の発行から 12 年後に刊行された【改訂本】は、果して本当に『萬葉集物語』の「改訂版」ということができるのだろうか？ 多くの国語辞典が、「改訂」の意味について、「部分的に改め直す」、或いは、「誤りや不備を直すこと」としていることは前述した。著者は、【改訂本】の刊行に当たって、<内容、章立てなどに、訂正、修正を加えた>と書いているが、言うまでもなく「部分的に」という要件を満たしている、とは、とても言えない。明らかに、著者は、基本的なねらいの 1 つを削除し、それを覆い隠した。改訂にあたって、根本的な編集方針の変更や、なにより子どもたちを軍国教育に駆り立てた、著者としての責任について言及がなかったことは、今の時代の価値観から若き著者に、それを求めるのは酷かもしれないが、その後の本が良書だけにきわめて残念なことだった。

【初版本】は、金蘭社という出版社から発行されているが、【改訂本】は、富山房という別の出版社から刊行されている。明治 19 年に創立され、『大言海』やその後主に児童向けの良書を出版している老舗出版社だが、新しい本として生まれ変わって出版されたということだろう。新たに編集された【改訂本】が名著の誉れ高かったことから、半世紀以上後の平成 20 年、富山房インターナショナルから【復刻本】が刊行された。それにより、【初版本】と【改訂本】の存在が明らかになり、『萬葉集物語』の素顔が露わになったのである。この本そのものが、2 度とこのようなことを繰り返してはならない、という貴重な教訓になったことは、大きな副産物だった。



【復刻本】

そもそも万葉集が、古代の天皇中心の国家体制の中から生まれた「忠君愛国」の歌集であることを否定することはできない。集中、大君を讃える歌は数えきれないほどある。ある著名作家に「日めくり万葉集」の出演を打診した際、「万葉集は何首も暗唱できるほど好きだが、忠君愛国の歌集でもあるので、好きとは言い切れない。だから出演できない」ということを聞いたことがある。そのようなことを耳にし、また、万葉集が戦意高揚や軍国教育の道具に利用された、と書くたびに思い浮かんでくる人物がいる。平岩さんも大好きだったという大伴家持、その人である。言うまでもなく、家持は大和朝廷以来の武門の名家大伴家の嫡男として育ち、大伴一族の氏上となった。そして、今の防衛省に当たる兵部省の次官、兵部少輔に任ぜられ防人の監督に当たった。その後長官の兵部大輔に昇進、最後は、陸奥の蝦夷を討伐する持節征東将軍にまで昇りつめた。持節将軍とは、天皇から節刀を授けられた軍の最高司令官である。

万葉を代表する歌人でありながら、武門の名家に生まれた武人、「もののふ」として、軍歌「海ゆかば」の作詞者に祀り上げるなど、軍国教育のシンボルとして利用するには絶好の人物だったのかもかもしれない。しかし、実際の家持はその逆で、生涯にわたって幾度となく起こった争乱や謀反に与することなく、一族もそれらに巻き込まれることなきよう、長歌「族を諭す歌」を作って訴えるなど、戦意高揚や軍国教育にはまったく相応しくない、むしろ、「非戦のもののふ」と呼んでもいいような武人だったのではないだろうか。

兵部少輔の時は、防人を検校する役目でありながら、妻や子、父や母との悲別を詠う防人たちの歌を多く集め、自ら「防人の悲別の心を追ひて傷み作る歌」など数首を詠む。このように防人たちの歌を集め自らも歌を詠んだのは、それらを朝廷に奏上することにより、東国の農民を九州の防人として徴用する制度を廃止させるためだった、という説もある。事実兵部大輔に昇進してしばらく後、その制度は廃止され、それ以降防人は地元の九州から徴兵することになる。

ことほど左様に、家持ほど、防人たちの心情に思いを寄せ、兵やその家族たちの気持を思いやる、そんな司令官が、これまでわが国にいたろうか。確かに大君を守る伴造（とものみやっこ）、文字通り大伴家の氏上として、家持は終生天皇に忠誠を尽くし、大君を讃える歌も数多く作ったが、大和の国やその自然を愛で、多くの女人を愛し、兵を慈しむ家持は、まさに「愛のもののふ」と呼ぶに相応しい武人であり、歌人だった。

そんな家持が、亡くなってから1か月後に起こった藤原種継暗殺事件の首謀者と目され、官籍から除名、資産は没収、遺骨は埋葬を許されず隠岐島に流罪という思いがけない最期を迎える。それから20年余り後、晴れてその罪は解かれ、昔の官位に復し、そして、官庫に封じ込められていた万葉集が初めて陽の目を見ることになる。「いや重（し）け吉事（よごと）」と世の平安を願う、家持自身にとっても、そして、万葉集にとっても、最後の歌が詠まれてから半世紀近く後のことであった。

そんな激動の時代を明（あか）き心もて生きぬいた家持を軍歌の作詞者に仕立て、万葉集を戦意高揚や軍国教育の道具として使うのはあってはならないことであり、それは家持に対する冒涇であると言っても過言ではないだろう。

かつて万葉集が、忠君愛国のために悪用されてきたという負の歴史を振り返ることにより、万葉集由来の令和という新しい時代に、万葉集の存在意義とその持つ魅力を改めて見つめ直すことが、今求められている。

そのことを、この3冊の『萬葉集物語』が、私たちに教えてくれている。

